
last love&first love

青井 黄赤

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

last love&first love

【Nコード】

N3381M

【作者名】

青井 黄赤

【あらすじ】

古来より魔法が日常生活の術として伝わってきたアーティクス大陸にはアーク王国・イクス王国・アーティクス皇国という三つの国が互いに睨みを利かせながら、淡い平和を築いていた。

そんな中、イクス王国の六大貴族の一つ、水月家の長女である海華^{みか}は王立魔法学院に通っていた。家紋の重荷を背負いながらも妹や弟、幼馴染たちと楽しく過ごしていた海華の日常を過ごしていたが、そんな海華に激震が走った。それは天才と称される今は無き海華の兄と瓜二つの少年、竜宮院 六との出会いであった。家紋と海華を捨

て、自由を得た兄の存在は一人の少女にはあまりにも重すぎた。歩み寄ろうとする六と過去の亡霊に捕らわれてしまった海華。二人は次第に幼すぎる好意を抱き始める。

思いを次第に募らせていく海華は迷い込んでしまった戦場でシーと名乗る白髪赤眼の少年と出会う。血の臭いを漂わせ、何かに苦しむシー。どうにかして重荷を取り除こうとする海華。二人の少年に抱く思いに苦しめられていく海華。だが海華は知らない、自分が背負う重荷と他者が背負う重荷との絶対的な違いを。

友達や六、シーと切磋琢磨し、気持ちを通わせ、一人の立派な大人になろうと足掻きつづける海華。

しかしそんな海華たちの前に立ちはだかるのは純粹すぎる野望と伝えてはならぬ恋心と残酷すぎる優しさ。

そして最後に海華が選ぶのは。

消え逝くプロローグ

人間は不の感情を根幹に抱いて生きていく、というのが私の持論である。

私の父は自身の期待を裏切った人物への恨みを胸に仕舞い込み、日々を費やしている。

私の母は自身を守りきることの出来なかった人物への罪惡に蝕まれ、日々を失っている。

そして私は自分が一身に受けずに済んだ全ての期待と重荷を押し付けていった人物への憎惡を心に宿し、日々を虚勢で心を守りながら過ごしている。

こんな、こんなに醜い感情など抱きたくなかった。

こんな直視することさえ躊躇われる感情を抱くくらいなら、親愛なる妹や弟達と同じように何も知らずに平和に日常を過ごしたかった。

それさえ叶わぬのであれば、全ての記憶を失っても忘却したかった。

全てを失って、無知と笑われながら重荷でしかないこの家紋を守っていく運命を押し付けられて、従順に、瑣末な疑問を抱かずに生きていくほうが良かった。

この心はいつからこんなにもなんとも醜く、なんとも汚らわしく、なんとも厭らしいのだろうか。

そう思いながらも私は日々を塗りつぶしながら生きていくことしか出来ない。

私はその方法以外に日常を過ごす方法を知らない。そしてそれ以外は赦されない。

それが私の宿命。

では父の恨みの禍根であり、母の罪惡への所以であり、私の邪心の根源である彼は何を考え、何を感じ、何を想いながら、名門たる家門を出て、名家から逃げて、何処に逝ったのでしょうか。

瞼を閉じれば、今でも細部まで鮮明に蘇って来る。

愚図る幼き私を暖かく包み込んでくれた一回り大きな掌。石に躓いた私を見て、笑いながらも差し出してくれた手。父にしかられた私の頭を撫でると時に比例して大きくなっていく笑窪。私が何度も転びながら必死に追い駆けていた厚く暖かく抱き締められる毛布のような厚く、逞しい背中。

どうして？ いったいなぜ？ 私を置き去りにしてこの重すぎる家紋を私に押し付けたのでしょうか？

どうして？ いったいなぜ？ 私には何も言わずに消えたのでしょうか？ それほどにもこの私が憎かったのですか？

貴方が私を捨て去った理由は私には分かりません。しかし十年という歳月は私の心を孤独から護り切るにはあまりにも長過ぎて、私の幼い愛を醜悪な憎悪へと変えるにはあまりにも短過ぎました。

だから私は貴方を地の果てまでも追い駆け、そして貴方を見つけて出し、貴方のことを辱めましょう。

たとえ、貴方の魂が天に昇ろうとしても、私の肉体が朽ち果てて土になってしまったとしても、その身体を切り刻み、その魂を未来永劫の彼方まで縛り付け、口伝することさえもおぞましく、脳裏に掠めることさえも禁忌と想われるまで貴方を陵辱いたしましょう。

だから永遠にさようならです。

せめて、せめて私の心の片隅に、太陽にかかる薄雲ほどの両親があるうちに愛しい貴方を今ここでささやかながらも弔いましょう。

さようなら。さよなら、私だけの愛しい、愛しいお兄様。

いえ、さようなら愛しい。

悪しきプロローグ

THE UNKNOWN SIDE

晴れることが無いように思えるほどの濃霧と小鳥達の囀りを聞くには一刻ばかり早い闇の中に掠れた男の息音が首都へ通ずる表通りから外れた、人気の無い裏路地から反芻する。

数箇所に拳大の穴が開いた、いわゆるナチュラルダメージの施されたダークバイオレットのジーンズと葉脈柄で薄黄色と深緑色のポロシャツを着た、お世辞にも綺麗とはいえない身形の男は先日の雨を吸いきっていない地面に腰を落としていた。

腰を落とす、というよりも腰を抜かしたというほうが的を射た表現である。

そして男は地面に腰を貼り付けながら、自分の眼前にいる男を外なるモノを目の当たりにした顔で見、恐怖で顔を強張らせている。

男は思った。

モンスターのほうがいくらかマシだ、と。

先月は新規の顧客も増やし、後輩をつれて飲みに行き気持ちよく酒を楽しんでいた。

もう一軒ハシゴしようか聞こうと思ひ振り返ると五人の後輩達は全員仲良く泡を吹き倒れていた。

いくら若かったといっても危険な仕事を数回経験した人間が一瞬で音も立てずに絶命するなど正気の沙汰ではない。

それこそバンパイアの真祖と一般兵士ほど隔たりがある。

つまりそれほどの危険な存在がすぐ傍にいて、自分の身が危険に曝されているのだから危機感を抱くのは当然のことである。

そして月光に照らし出された姿は不死のバンパイアでもなければ王族警護隊のガーディアンでもなく、か細く、柔らかな笑みを浮かべたたった一人の人間であった。

闇色のスラックスに同色のワイシャツ、それらよりもさらに深い色のフード付きのローブ。

フードからは収まりきらなかった白銀色の髪が幾束が見受けられる。

通夜に参列し、その帰りに出会ったような身なりはとても上品で律法と言う概念が通っていないこの通りには不似合いすぎた。

そして何よりも異質なのは瞳である。

憤怒を具現したような紅蓮色の瞳は自身を見る双眸に畏怖の念が込められているのにも拘らず、特段気にした様子も無く腰を抜いた男を見下ろす。

その紅蓮の瞳を持つ男は獄炎のような瞳と相反してゆっくりとした、芯の冷えるような声で男に問う。

「お前がデーモンズ・ゲート幹部の黒川 秋晴だな。」

黒川 秋晴と呼ばれた男は驚きの色を隠せず、口を開いたまま固まっている。

しかし男は黒川のそんな姿を気にした様子もなく決定事項を確認していくように問いただす。

「ああ、別に返事はしなくてもかまわない。ただ、俺の質問に答えてくれればいい。ちなみに黙秘権・拒否権は使用可能だ。というよりも俺一個人としてはぜひとも黙秘権を行使してもらいたい。」

黒川はロープの男の言葉に困惑しながらも本能的に、音を立てずに左手をベルトのホルスターに寄せていく。

どこの誰かは分からないが敵と分かった以上は恐れる必要はない。

殺す、それだけのことである。

そんな思惑を抱き、自分に危険が近付いてきていることに築いた様子も無い紅蓮の瞳を持つ男はひとり淡々と話を続けている。

「だってそうだろ？」

社会のゴミを抹殺する為に報告書を三枚、四枚書くよりも『標的有力な情報は得られず、かつ尋問に対して反抗、および攻撃をしてきたので応戦。鎮圧はしたものの再び尋問しようとしたところで自らの頭を打ち抜いて自殺してしまった。』って書いたほうが貴重な資源も一枚だけですんでなおかつ環境・経費に優しいだろ。

というわけで自衛権を行使する為に是非とも反抗もしくは黙秘権を行使してくれないかな、社会のゴミ君。」

男は両手を左右に大きく開き、満面の笑みを浮かべて黒川を見る。

その姿は陽気で友好的なイクス人のようだが催促しているのは死であり違和感を生じさせている。

「っち、勝手にほざいてるよ。」

どうせ明日の朝刊に載せられるのはお前が死んだって記事だらうからな。

黒川は心の中で悪態を吐きながら安全レバーを外し、乙戸が立たないように細心の注意をはらい、ホルスターから静かにホックに手を添えた。

ホックの金属部分に触れると汗が一筋、背中を伝う。

そつと男の顔を見る。

男は黒川が反抗するとは思っていないらしく人あたりのよさそうな顔で先ほどから始まってしまった仕事の愚痴を垂れ流しにしている。

ベルトのホルスターから手のひらにそれは滑り落ちていった。

それはどつしりとした黒光りする十三口径の大型拳銃である。

それを掴み、勝利を確信し、沸きあがってくる笑みをかみ殺すことに集中する。

黒川に愛銃は違法改造を何度も繰り返しており、王国が規定する一般人の所有許可範囲をはるか後方に抜き去っている。

肉体強化をしていなければ成人男性ですら肩の脱臼を間逃れることは適わないほどの衝撃力と破壊力。

それに加えて銃弾は二十年ほど前に製造および使用を禁止垂れるほどの凶悪な散弾であった。

その銃弾は着弾と同時に炸裂し、行く銃にも砕け散った破片が骨肉を撒き散らし、耐えようの無い苦痛を被弾者に与える。

それゆえにこの銃弾は古代語で暴食を表す“グラトニー”と名付けられた。

秀でた肉体強化魔法と違法拳銃によって蹴散らしてきた相敵は三十を超えたあたりから数えることを辞めてしまった。

そしてこの世界での通り名は“暴食漢”である。

そして黒川は笑みを押し殺すことをやめ、心底楽しそうな笑い声

を甲高く雑居に覆われた薄暗い頰利に嬉々とした表情を浮かべながら銃身をローブの男に向けた。

「はははっ！！ざまーみやがれっ！！」

どうやら報告書とか言うのに名前が載るのはこの俺様じゃなくて小汚いお前のほうだったみたいだな、クソガキ！！
地獄でママのおっぱいでも吸ってろよっ！！」

右手に感じなれた心地よい衝撃が、瞼には迸った鮮やかな閃光が、自身の勝利を祝う打ち上げ花火のような気がした。

それは黒川にとって何物にも変えがたい極上の快楽であった。

しかし次の瞬間、黒川の目に映ったのは先ほどと寸分欠けぬ身体で笑みを見せる男と相棒とも言える大型拳銃とともに消えた自身の右手首だった。

「.....は？」

傍から見れば酷く滑稽な様子だっただろう。

自分の手が消えているというのに黒川の口から漏れたのは苦悶の声ではなく、絶望に打ちひしがれる声でもなく、自分に降りかかった災厄を目の当たりにして混乱し、その反応は第三者よりも第三者らしい反応だった。

そして刹那。

黒川の左手首から先が存在していたところからはおびただしい量の鮮血が黒川に愛想を尽くしたかのように噴水の如く、重力にしがたがってアスファルトの上に落ちていった。

数瞬して遅れてやってきた空きような無い激痛が黒川の頭を叩き割らんとする。

全身がこの目の前に立ちはだかる男は危険だと警鐘を鳴らし、生物的本能が身体の内奥で暴れる。

小豆ほどの大きさになる脂汗が顔一面に浮かび上がり、どこから湧き上がってくるのか分からない、嗚咽とも悲鳴とも付かない獣

染みた悲鳴が雑居の立ち並ぶ道に反響してエコーがかかり、万華鏡のように繰り返して聞こえてくる。

黒川は奥歯を噛み締めて散り散りになった意識をかき集めた。

悲鳴を飲み込み、左手と愛銃が消されたであろう原因をかるうじて睨みつける。

その男はミュージカルのように身振り手振りを大袈裟にして黒川にまるで互いが旧知の新であるかのように親しげに話しかけてくる。

「大丈夫ですか？ 全く、銃火器の扱い方には細心の注意を払わないといけませんね。

俺もあなたの経験を生かしてこれから過ごして生きますね。ええつと、安全レバー、ははずれていますね。

スライドしてるし、旧式だけどオートマ、で銃弾もちゃんと残ってますね。手入れはちゃんと行きて届いていますね。

なら後は狙いを定めてトリガーを引けば撃てますよね、ね？ 俺、いやですよ、暴発で負傷とか。

同僚にどれだけ笑われると思ってるんですか。それにうちは労災とか無いんですよ、全額自己負担ですよ。

今時いつの時代だって感じですよ？……さて、そろそろおなかも空いてきたのでお仕事も終わらせましょうかね。」

男は笑みを浮かべたままゆっくりとアンデットののような速さで
近付いてくる。

一歩。

二歩。

三歩。

四歩。

五歩。

男の歩き方は芝居がかったように見え、それはさながら最愛の息子との散歩を楽しんでいる父親のようにすら見える。

今すぐに立ち上がって、後ろの道に走って逃げれば逃げ切ることは容易いだろう。

しかしそうしようにも身体は大蛇に巻き付かれたように動かすことが出来ない。

そして黒川と男との距離が十センチメートルを切ると男は歩みをやめ、発射口を黒川の頭部に押し当てた。

男は黒川に優しく微笑みかけると笑顔を少し傾けてから口を開いた。

「最期に聞きますね。しゃっべって苦痛を感じる暇もなく死にますか、それともしやべらないで苦痛とともに死にますか。」

黒川、あなたが死ぬと言う結果に変わりはないのですが、まあ、殺す側と殺される側と言う縁ですしせめて最期くらいは選ばせてあげようと思ひまして。

まあ、これがうわさに聞く『最期の審判』ってやつですかね？

俺的には洒落ていてなかなかいいと思うんですけど。どう思ひますか、あなたは？」

男が話しかけると黒川は賢者に縋る愚民のような表情で口を開いた。

しかし最期の言葉は男の耳に響くことも無く、硝煙と残響に包まれながら音に大きな風穴を開けたまま黒川は地に這った。

「散り際の美学、とまでは言わないけどせめて死ぬときくらいは黙って潔く死んどけよ、クズが。」

男は興味を失い、落胆したらしく無造作に拳銃を放り投げるとそれはきれいな放物線を描き、黒川の足元に落ちた。

事切れた黒川に背を向け、男は歩き出した。そして何かを思い出したらしく黒川のいたほうに振り返って話しかけた。

「そういえば俺の自己紹介がまだだったな。俺の名前はシー。ファミリーネームはない、ただの『シー』だ。」

それでは黒川 秋晴、せめてあなたに一抹の幸せがあらんことを。」

硝煙に満ち、血が地面を汚し、死臭が立ち込めだした裏路地には似つかわしくない笑みを張り付かせた、自称『ただ』のシーはその日初めて屍に成り果てた黒川に向け、人間らしい笑みを浮かべた。

黒川に背を向けるとロープの中に隠れていた水連を象ったネットレスが、淡い月光に照らされて慎ましくも光を照り返していた。

黒いロープを羽織り、水連のネットレスを揺らし、紅蓮の瞳で世を睨む男、シーは青みを帯び始めた空の中に朝靄と一緒に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3381m/>

last love&first love

2010年10月9日20時43分発行